関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

『為世の草子』と『三人法師』第三話についてー『三人法師』の成立は果たして古いかー

著者	橋本 直紀
雑誌名	國文學
巻	61
ページ	41-49
発行年	1984-11-25
URL	http://hdl.handle.net/10112/5426

『為世の草子』と『三人法師』第三話について

――『三人法師』の成立は果たして古いか――

橋本直紀

室町物語『為世の草子』の伝本は、従来宮本長則氏旧蔵・現フォッグ美術館寄託の室町後期絵巻（元冊子本）のみが知られ、研究に供されて来た。即ち、市古貞次氏が紹介、翻刻された『未刊中世小説三』（古典文庫、昭26）および『在外奈良絵本』（角川書店、昭56）所収の本がそれである。

そのフォッグ本に続く、第二の伝本として、関西大学図書館に『為世入道物語』と題する写本一冊が存する。わたくしは本書を先年に一読、今回精読の機会を与えられたので、その際に気付いたこと、またこの物語の特色等につき、簡単に纏めておきたく思う。

なお関大本『為世入道物語』の書誌および本文は、本誌・本号に後掲の翻刻に就かれたい。

一、フォッグ本と関大本

『在外奈良絵本』のグラビア写真に依れば、フォッグ本は元はタテ型の奈良絵本と覚しく、その絵で人物の一人二人をポツンと描いている所や、また挿絵頁のほぼ半数に本文が自由に入り込んでいる点などからして、奈良絵本の早い頃の特色を良く備えており、市古氏が各個解説（五八頁）で室町後期とされているのは、よく納得させられるところである。

関大本は墨付二一丁の写本、物語の冒頭・巻末を欠く。『在外奈良絵本』の翻刻（一九六～二〇二頁）で示せば、一九七頁上段中程の「ひめきみをそまふけ給ふ。やかてめのとをつけて」あたりから、二〇二頁上段中程までを存する。が、同翻刻頁中に指摘されているフォッグ本の四箇所の脱文のはじめ三箇所までをよく補い得るので、両本を併せ見ることで為世の物語はほぼ完全な形での通読が可能となる。ただし、両本、物語の展開は完全に一致するものの、叙

述の細部には可成りの隔たりがあるので、直接の書承関係を言うことは出来ない。

フォッグ本の脱文の、関大本当該箇所は、直接関大本の本文を見て頂ければ分かることなので、一々引用することはしない。ここでは各本に固有の記述、説話的事項、語彙について気付いたことの一、二を指摘するに留める。

フォッグ本のはじめの方に、次の様な記述がある。

けんこう三ねんみつのとのとりの春よりも、みやこもみたれそめ、おなしく五月には、ろくはらつゐにおち給ふ。あふみのくにはんはと申すところにて、すいふんのさふらひ四百卅よにんまて、しかひしてうせにけり。京とのらんはかりなし。

この部分、関大本は、

そのころ、かまくら、みたれぬときこゑし□□□やうとのさわき、申事はかきりなし、□□とう三年、癸酉のとし、すてにみやとを、おちさせ給ひけり

とするのみである。ところがフォッグ本の傍線部とほぼ同一内容の記事が『太平記』に見える。巻九「越後守仲時已下自害事」がそれで（引用は角川文庫本、底本は流布本・元和八年刊本）、

去程に両六波羅京都の合戦に討負て…番馬、醒井、柏原…／東山道第一の難所、番馬の宿の東なる…／幾輿跡に連て、番馬の峠を越んとする処に…／六波羅殿は、番馬の当下にて、野伏共に被ㇾ取籠ㇾて、一人も不ㇾ残被ㇾ討給たり／（仲時の自害に宗秋が殉じて後）是を始として…是等を宗徒の者として、都合四百三十二人、同時に腹をぞ切たりける。

とある部分。フォッグ本がこの件を何から得たかは分明でないが、『太平記』とは全く無関係と片付ける訳には行かない様に思う。『為世の草子』は二条為世に仮託の物語とされている。『和歌文学大辞典』（明治書院、昭37）「為世」の項（久松潜一氏）に、「文保二後醍醐天皇が即位され、為世は歌壇の長老として重んじられた。…元徳元七九歳に出家するまで約一〇年の間、最も声望を集めている。出家後は北条高時討伐の挙が起り、後醍醐天皇隠岐遷幸の事もあり、為世は高野にこもって世の争乱を避けたと伝えられる」とある。為世が実際に、高野に時の乱を避けたか否か、確かな資料は無い様であるが、南北朝の争乱を高野に避けた人は夥しい数に上ったであろう。そして『為世の草子』は高野に強く結び付く。この物語は、或いはそういった人々のうちからもと発したもので、為世に仮託の物語と言うなら、右の様な文脈においてそう言うべきではなかろうか。或いはまた、この物語の原作者の蹈かれた環境を些か暗示したものと捉えることも出来ようか。

関大本で、為世が二人の幼い者を秘かに見守るうちに洩らす、浄

蔵・浄眼と早利・速利のこと、および「にんわう十六代、おうしんてんわうの御こ、なにわわうし（のちの仁徳天皇）、うちの御子（宇遅能和紀郎子）、たかひに、そくいし給ふ御心□て」という、応神天皇の二皇子が互いに帝位を譲り合った故事は、フォッグ本には無い。なお応神天皇を第十六代とするのは『神皇正統記』あたりに依ったものか。『正統記』の数え方では、実際には即位しなかった神功皇后が第十五代、応神天皇が第十六代、仁徳天皇は第十七代である。仁徳天皇条に「応神カクレマシ〳〵シカバ、…太子天位ヲ尊ニ譲給、尊堅クイナミ給。三年ニナルマデ互ニ譲テ位ヲ空ス。太子ハ山城ノ宇治ニマス。尊ハ摂津ノ難波ニマシケリ」（引用は岩波大系本）とある。先の為世その人のことと併せて興味深いものがある。

それと、これは両本に共通の場面であるが、弟を寝かせたあと妹が髪を梳ってのち二つに切る件で、関大本が「ひめきみは、かみをそけつり給ひける、みれは、おひしきはにとつきける、このかみを、ふたつにわけゆひて、つまかたなにて、きり給ひけり」とする所を、フォッグ本は「あねはかみをけつりしか、ふたつにわけてつまかたなにてはやしけるを」とする。フォッグ本「はやし(はやす)」は「切る」の忌詞である。用例として一寸注目すべきか。

二、諷誦文

『為世の草子』の後半は、うんこし（雲居寺）における説法の場に姉弟が赴き、導師にふしゆ（諷誦）文を上げる件と、その後の姉弟の投身より成る。その諷誦文の件を両本は各、次の様に記す。

〔フォッグ本〕うんこしちかくなりぬれは…／きせんくんしゆの人々、おもひ〳〵にふしゆをあくるに…／このおさあひもの、はこのふたに物をいれてたてまつりけるを、たうしとりて御らんすれは、ゆふへきりたりしかみなり。なかにかきたる物をとりあけ、よみ給ふをきけは、

これはもとみやこのものにて候か、一とせのみたれに、ちゝはゝもろともにみやこをゝちてのち、ちゝにはいきてわかれたてまつり、はゝにはこそのけふしゝてわかれて候へは、一めくりの心さしにみつからかさんさしをわけてたてまつる。又はこははゝうへのかた見にて候へとも、かのほたひのためにさゝけ申なり。御たすけ候て給候へしとて、かくなん。

たまてはこふたおやそはぬみなしこのなか〳〵いきて何にかはせん

とかきて、月日のしたに、

あねたまつるによ、しやうねん十二さい、おとうとわかつる丸、十さい

と、よみあけ給へは、これをきくくんしゆの人々、そてをしほ

らぬはなかりけり。

〔関大本〕さて、かのてら（うんこうし）も見へけれは…／さるほとに、おもひ〳〵の、ふしゆをあけける…／おもひ〳〵、こゝろ〳〵のふしゆをそ、あけたまひける…／さて、たうし、めん〳〵のふしゆを、かうしたまひてのち、この人〳〵のふしゆをそ、よみたまひける、みな人〳〵のこゝろさし、いろ〳〵を、あけたまふ、ふしゆのくとくによりて、くわこしやうりやうあんやふのしやうと、九ほんのれんたいに、むまれ給へは、ゑかうして、そのゝち、おほせられけるは、おゝくのふしゆの御中に、ことにあはれにおほえ候は、十才にたるやたらさるひめきみ、又は、六や七ツはかりなる、おさなき人々の、二人、御わたり候か、ことに御こゝさし、せつなる御ふしゆを、さゝけまし〳〵候そや、てはこのかけこと、おほしきに、かみをふつにゆいわけて、いれたまひて、

これは二しんのしやうりやうのために、我かくろかみを、みつからきりてまいらせ候、われらかおとゝい、まいにち申候、ねんふつの、くりきにより、かならす〳〵、一ふつしやうとのゑんと、なしおはしませ

と、かゝれて候か、もしのならひ、しとろ〳〵にて、はしかきに、一しゆのうたを、あそはして□り

たまてはこ、ふたおやそはぬ、身なし子の、中〳〵いきて、なにゝかはせん

かやうに、いたいけなる御手にて、あそはして候…／この人々の御こゝろさしをもつて、かならす九ほんのれんたいに、むまれたまはん事、うたかいなしと、ゑかうして、すみそめの御そてを、しほり給ひけれは…／みなそてをそ、ぬらしける

やや長い引用となったが、概して関大本の方が詳細である（このことは全体に亘っても言えることである）。

所は蛍居寺。説法の場。群衆する貴賤。導師の前に進み出る姉弟。諷誦を上げる人々。やがて読み上げられる姉弟の諷誦文。これに近似の、少なくともその成立は『為世』より早いと思われる例に謡曲「自然居士」がある。次の通り（引用は岩波大系本『謡曲集』上、底本は天正四年堀池謡語本）。

かやうに候者は、東山蛍居寺のあたりに住まひする者にて候、ここに自然居士と申す喝食のござ候ふが、一七日説法をおん述べ候…／導師高座に上がり、発願の鉦打ち鳴らし、（表白文あり）（子方、小袖をシテの前に広げ、状を差し出す）／や、これは諷誦をおん上げ候ふかげにこれは美しき小袖にて候、急いでこの諷誦文をご覧候へ　敬つて白す請くる諷誦のこと、三宝衆僧のおん布施一裏、右志すところは二親精霊頓証仏果のた

め、蓑代衣一襲ね、三宝に供養じ奉る…

この様な設定そのものは謡曲また物語に散見する所で珍しくはないが、霊居寺・説法・諷誦文（今の場合「ふしゆ」なる語彙をも含む）の三要素を備えた例は少ないのではないか。管見の限りでは『三人法師』第三話のみである（但しわたくしには本作について少しく不審がある。次節参照）。だからといって『為世』がこの件を「自然居士」から得ていると言うつもりは全くないが、関大本の「これは二しんしやうりやうのために」と、「自然居士」の「右志すところは二親精霊頓証仏果のため」など、一脈通じる所がある様に感じられる。『為世の草子』の成立は存外古いのではあるまいか。

三、『三人法師』第三話

現フォッグ本を早くに紹介された市古貞次氏は、先掲の解説等において、『為世の草子』に交渉する物語・説話として、『三人法師』第三話、『朽木桜』『西行』、『吉野拾遺』下の右馬允行継の発心談、謡曲「土車」「為世（水無瀬）」「苅萱」、また古浄瑠璃『葛葉道心』等を挙げておられる。これらのうち、当面わたくしが問題にしたいのは『三人法師』第三話と『為世』の関係であり、殊に両者の先後については強い興味を覚える。

『三人法師』の成立は何時頃であろうか。早い所では平出鏗二郎氏『近古小説解題』（明42）に「この書、室町時代の中頃に、なりしものか」「時慶卿記、慶長十年三月七日の条に、三人僧とあるは、此物語ならんか」とあり、尾上八郎氏の校註日本文学大系第十八巻『吉野拾遺』（大14）解題に「三人法師は、室町時代の中頃又はやゝその以降に成つたものかと思はれる。而してこの書のを（注、右馬允行継の話を）改作して、その一節を構成したものとするのが自然」とある。一方、島津久基氏の岩波文庫『お伽草子』（昭11初刷）には「但し稍仮名草子的傾向に近づいて居り、且、その仮名草子の七人比丘尼・二人比丘尼・四人比丘尼等、同系の一群の始祖をなしてゐる」とあり、同氏の新潮社『日本文学大辞典』（昭25の増補改訂版による）「三人法師」の項には「（第三話は）行継の話が原説話とすれば、更に厳密な資料批判の余地があろう」ともあって、見解は分かれている様である。

『三人法師』は、先掲平出氏に夙に指摘のある通り、慶長十年までは遡り得るが、それより早い記録はなく、伝本で古写本と称し得る本は報告されていない。今の所、寛永頃の覆古活字本（大洲市立図書館蔵）が現存最古であり、寛永頃の丹緑本、正保三年版、明暦四年版等と続く（丹緑本以下は一系）。わたくしは『三人法師』の成立年代を考える上で、その第三話と『為世の草子』を重ね見ることが有効であると考える。『三人法師』第三話は『為世』と最も深

く関わるであろう。以下、そのことについて記し、両者の先後関係につき、仮説を提出したい。

『三人法師』第三話と『為世の草子』の筋立ては、その結末部を除いて酷似する。就中、諷誦の件において顕著である。いま、前節に引いた『為世』のそれと比しつつ、両者の関係を見る。

『三人法師』第三話（以下、引用は『室町時代物語大成第六』所収の丹緑本、傍記の覆古活字本も使用する。角川書店、昭53）。姉は九歳、弟は六歳。二人して「たまの、手ばこの、ふたをば、あねがもち。かけごをば、おとゝがもちて、たれかをしへけん。竹と木との、はしをもちて、（亡母の）こつをひろ」うことが先ずあって、この御骨を納めるべく、尊き上人御説法の「ほうにんじ」（傍記覆古活字本「法忍寺」、左傍記「報恩寺カ」とある。また後出、覆古活字本は「ほうおんし」）へ参る、と続く。やがて上人の御前に至る。

あねが、手ばこのふたを。上人の御前に、さしをきて。／…母にて候ものさへ、わかれて。けふはや、三日になり候。御こつをだにも、とるべきもの、なく候て。兄弟（きょうだい）のもの共取て、はこに入ては、候へども。をくべき所を、しらず候て。上人を、たのみ参らせんが、ために。是まで持て参り候。／…さて、あねがたもとより。一つの、まきものを取出し。上人に奉る。上人、是を取あげさせ給ひて。〔（以下二十字分覆古活字本）ひとへに、ふしゆくわんもんなとを、よむやうに〕たか〳〵と、あそばし候ひしを、承り候へば。／（巻物の内容、略）…と。こざかしく、年号、日づけまで、かきて。おくに、一しゆのうたを、かきたり

みるだひに（やま）、なみだぞまさる、玉手ばこ、ふたおやともに、なしとおもへば

玉手ばこ、ふたとかけごの、くろかみを、いふかたもなき（ゆふ）、身をいかゞせん

／…是を、きゝみる人。あるひは、もとゆひをきり。刀にそへて、上人の御かたへ参らせ。御弟子になるも有。あるひは女しやう、かさの下より、かみをきりて。上人に参らせ。ほつしんする人もあり。そのほか、とんせいする人、数をしらず。

以上、『為世』に比すれば、酷似と言うには程遠いとする見方も可能であろう。『為世』で姉弟が上人に捧げるのは、姉自らが二つに結い分けてのち切ったおのが黒髪であり、『三人法師』のそれは姉弟で拾った母の遺骨である。また『為世』における諷誦文と『三人法師』の巻物の内容も一致しない。歌（『三人法師』は奥に一首としながら二首の歌を出す。「一」は「二」の単なる誤刻とも思えない）も、その意味する所は同じであるが、完全な一致と言うには、

遠い。しかし、正にこの所にこそ『三人法師』第三話と『為世』の関係が如実に現れているのではないか。『三人法師』第三話には、多分に齟齬が存しはしないか。

結論を先に記す。わたくしは『為世の草子』の成立は可成り早く、『三人法師』第三話の骨子は『為世』から直接に得たのであり、『三人法師』は慶長十年からさほど遠からぬ、室町末期（最末期と言っても良いか）の成立であろうと考える。その理由はおよそ次の通りである。

『三人法師』の覆古活字本（古活字本が存したことは確実）の本文は、丹緑本以下の刊本（これらは殆んど変わらない）に比して随所に語句の異動がある。そのうち、特に注目すべきは、姉が袂より巻物を取り出す件に、「ふしゆくわんもんなとを、よむように」とあることであろう。ここに先ず『為世』との繋がりが見られ、古活字本（現時点では正確を期して覆古活字本と言うべきか）の依った写本（である筈）の『三人法師』に「ふしゆ」云々のことが存したことはほぼ間違いない所であろう。『為世』に「ふしゆ」が多出し、そこで導師が読み上げるのは諷誦文そのものであることは、前節に記した通りである。

なお『三人法師』の写本は、三本まで検し得たが（『未刊中世小説一』〈古典文庫、昭22〉所収の屋代弘賢旧蔵市古貞次氏蔵天保二年写本。西沢正二氏『名篇御伽草子』〈笠間書院、昭53〉所収の内閣文庫本。西沢氏『中世小説の世界』〈三弥井書店、昭57〉所収の天理本）、内閣本は古活字本系の写本であること明白である。はっきり「ひとへに諷誦・願文などを読むやうに」とある。ただし諷誦文末の歌は「見るたびに」の一首のみである（後述）。天理本は丹緑本以下の刊本系か。市古本は「上人是をとり上させ給ひてとあるふじゆにあげ申ける」とあるが、歌は「玉手箱二親ながらなかりせばかけごの塵を誰かはらはん」とあって、刊本系また『為世』のそれとは異なり、系統は不明である。

そして、その諷誦文末の歌。『為世の草子』における姉は、雲居寺説法に参る前夜、おのが黒髪を二つに結い分け、切る。それを「はこのふた」（フォッグ本）、また「てはこのかけこと、おほしきに」（関大本）入れて導師に差し出す。『三人法師』第三話では、「たまの、手ばこの、ふたをば、あねがもち。かけごをば、おとゝがもちて」母の骨を拾い入れ、「あねが、手ばこのふたを」上人の御前に差し置くのである。問題とすべきは、それに続く諷誦文末の歌である（『為世』のそれは前節参照）。『為世』の歌そのものに不審はない。しかし『三人法師』の二首の歌には大いに不審がある。その一首目は良いとして、二首目はどの様に理解すべきであろうか。二首目を市古氏は「玉手箱の蓋と懸子のように、二親から別れた子ど

も（自分）の黒髪を結いようもないが、そのように何とも言いようもない私の身をどうしたらよかろう」（岩波大系本『御伽草紙』の頭注）とされるが、更に進めて「いま御上人様に捧げましたる手箱の、その蓋と懸子に二つに分けて載せましたこの私の黒髪を、最早結うすべも（結ってくれる人も）ありません。その様に、何とも言い様のないわが身をどうしたものでしょうか」と解すべきではないか。『三人法師』第三話のこの件より先に「ふたとかけごの、くろかみ」を言うことなく、およそ黒髪に繋がるべき何の記述も、暗示もない。実に唐突な歌と言わざるを得ない。これこそが、『三人法師』第三話が『為世の草子』に依りながら、そしてほぼ完全なまでに『為世』を消化しながらも、ついついその内に留めた齟齬（破綻と言っても良いか）であると思うのである。その様に見れば、この歌に続く、元結を切って刀に添えて上人に差し出す者、また笠の下より髪を切って上人に参らする女性たちの所為は活きてくるし、よく納得させられる記述となるのである。であるからこそ、先記の如く、古活字本また覆古活字本に依ったであろう内閣本（写本）は、「見るたびに」の歌のみを採り、「玉手箱」の方は捨てたのではなかろうか。

これまで『三人法師』を詳細に検討して来られた西沢正二氏は、最近の『中世小説の世界』（先掲）において、「（『為世の草子』は）全体的な構成・表現においては、素材と目される『吉野拾遺』の説話以上に、『三人法師』の第三話に近似しているものとみられる。もとより、『三人法師』と『為世の草子』との前後関係が詳らかでない以上、両者の影響関係については即断できないが、あるいは何らかの関連性を想定することも不可能ではないかもしれない。そのことはともかくとして、…」（一〇一頁）と記しておられる。氏の書き振りは飽くまでも慎重であり、結論は留保されているが、『三人法師』を論じる際には、先ずこの点を明確にしておくことが肝要ではあるまいか。わたくしは『為世の草子』と『三人法師』第三話に直接の関連性を認める。『三人法師』の構成は見事である。糟谷四郎左衛門・三条荒五郎・篠崎六郎左衛門また玄松・玄竹・玄梅という、登場人物名の整合は、その構成の妙を示す顕著な例であり、作者の作為が如実に現れている所でもある。『三人法師』第三話は『吉野拾遺』に依ったのではあるまい。『三人法師』の作者は、その第一・二話（これらは切り離すことの出来ない、首尾の整った物語である）に付け加える形で、元来は無関係な為世の物語を巧みに脚色して第三話としたのである。『三人法師』はその様にして成った結構の物語であると思うのである。

以上、『為世の草子』は『三人法師』に先行し、後者は前者に直接に依っているであろうとする、試案である。大方の御批判をお願

い申し上げる。

四、『朽木桜』・謡曲「為世」・その他

『朽木桜』は『為世の草子』また『三人法師』第三話によく似た物語である。母の形見は手箱と（手箱の、と言う方がより正確か）鏡。その鏡を売り、清水寺に至り、折節説法の知識に鏡の売代を捧げて父母の供養を頼む、云々。しかしこの物語はそう古いものではあるまい。何れ『為世』また『三人法師』第三話あたりの翻案かと思われるが、（少なくとも『為世』よりは後であろう）、全体に力やや弱く、むねのふ・むねやすの契約のことはとまれ、むねのふ死して後のむねやすの行動も説得力を欠く。伝本は何れも横型の奈良絵本のみである。

謡曲「為世」（観世流）は、管見の限りでは貞享三年九月の林和泉掾刊本（番外）が最も早く、これに先行する写本また刊本は見当らない。ワキは高野山より出たる僧（為世）、もと津の国水無瀬の里の者。子方は為世の子、姉弟である。僧を父とは知らぬまま家に請じ入れ、亡き母の回向を乞う件のあとに、

オト、「未だ御聖は御帰りも候はぬ物を、唯今父ごを夢に見参らせて候。アネ「何と見たまひて候ぞ。オト、「さん候父ごの是迄御出にて、母の跡を弔ひ給ふと見まゐらする所を、おどろかさせ給ひて候程に、夢はさめて候へども、御面影は残るぞや、あら父恋しやあら恋しや。女「うらやましやうつゝに見えずは夢に成とも、など父ごぜんは見え給はぬぞと、おとゝの夢をうらやめば、弟「おとゝは有し面影を、恋しや床しやとて、共に涙をながしつゝ、地「おとどい袖をかたしきて、ぬれどねられぬ夜もすがら、夢を心にかくる身の、…（国民文庫『謡曲集』下巻〈明44〉による）

とあることとより、『為世の草子』に依っていること明白であろう。『三人法師』第三話にこの件は、ない。喜多流現行曲「水無瀬」は、「為世」の右引用の件を省略して成ったものであろう。

『為世の草子』や、その関連作の有する問題は大きく、その奥は深い。高野山との関わりもまだまだ不明とすべき点が多い。そして近年、正にそれらの問題を解明すべく試みて多大の成果を得られたものに阪口弘之氏「街道の伝承―篠崎入道と樟葉道心―」（大阪市大「人文研究」第三十五巻第三分冊、昭58）があることを記して、この小考を終える。